

「否定の扱い方」

川 口 義 一

0. はじめに

「否定」という構文論的・意味論的概念は、外国語教育のなかでかならず取り扱われ、学習されなければならない項目である。しかし、日本語教育の現場では、しばしば、正しい「否定文」が生成できない学習者を見うける。この原因のひとつは、学習者の母国語あるいは既習の外国語からの干渉である。たとえば、“I can hardly believe it.” のつもりで「ぜんぜん信じられます。」といったり、「...しか...しない」というべきところを「...だけ...する」と表現するような例である。しかし、また一方の原因は、「否定」という現象自体が構文論的にも意味論的にも複雑な性格を持つものであるため、教材を準備するがわでその複雑さを把握しきれず、学習者が確実に「否定の用法」を習得できるような教育体系がととのっていないことにもあるのではないかと思われる。

本稿は、拙稿 1982b¹⁾ をもとに、日本語の体系のなかにおける「否定」の構文論的な性格や意味論上の機能を略述するとともに、日本語教育のなかで「否定」をどのように扱えばよいのかを考えてみたものである。

1. 「否定」の分布

1-1 「否定」の位置と意味

「否定」は構文論上のいろいろな位置に現れる分布のひろい現象である。

1) 参考文献参照

しかし、すべての「否定」の文成分が同じ位置に分布できるとはかぎらず、同じ位置に分布した「否定」の文成分が同じ意味の「否定」を表すともかぎらないのである。たとえば、

- (1) 来ナイ。
- (2) 来ソウニナイ。
- (3) 来ルマイ。

において、「否定」の文成分であるナイとマイはそろって文末に位置している。ところが、(1)~(3)の文を連体修飾句に位置させると、それぞれ

- (4) 来ナイ人
- (5) 来ソウニナイ人
- (6) ??来ルマイ人

となり、(4)・(5)は問題ないが、(6)はかなり不自然な句となる。

- また、
- (7) サッパリ分カッタナイ。
 - (8) ケッシテ分カッタナイ。

では、どちらも文頭と文末に「否定」の成分が置かれて呼応しあっているが、同じ位置関係の

- (9) *サッパリ分カッタワケデハナイ。
- (10) ケッシテ分カッタワケデハナイ。

を見てみると、(10)は問題ないにもかかわらず(9)は成立しない文になってしまう。

このように、「否定」は構文論的にも意味論的にも同一でない各種の文成分に負われて文のなかに登場するのである。したがって、「否定」について考えるばあいには、「否定」の意味を持つ成分を構文論と意味論の両面から分類してみる必要があるであろう。

1-2. 「否定」を含む述語句の分類

前節で述べた主旨にしたがって、「否定」の分類を試みてみよう。日本語の「否定」はほとんど「述語句の否定形」の形で現れ、文頭・文中に位

置する「否定副詞」もこの「述語句の否定」と呼応するから、「否定」の分類も各種の述語句に接続させた形で行うのが便利である。いま、日本語教育でよく「文型」として取りあげられるいくつかの述語句の否定形を構文・意味の両面から比較してみると、つぎのようなグループ分け²⁾ができる。

- ① (動詞類³⁾)～ナイ / ～テイナイ
- ② ～テハイナイ / ～テハミナイなど
- ③ ～ソウデハナイ・～ソウニナイ
- ④ ～ハズガナイ / ～ワケガナイ
- ⑤ ～ワケデハナイ / ～ノデハナイ
- ⑥ ～マイ / ～ナ!

これらのグループは、構文論的にはつぎのような特徴をもつ

(i) ナイとタの接続に関して

①と②のグループはナイもタも前接しない。つまり、*シタナイ・*シタテイナイ・*シタテハミナイ・*シナクテハミナイなどすべて成立しないということである。シナイデハイナイ・シナイデハミナイは成立するが、それぞれシテハイナイ・シテハミナイの否定ではなく別の叙述内容をもつものである。

③のグループは、ナイが前接するが、タが前接しない。シナソウデハナイ・シナソウニナイとは言えても、*シタソウデハナイとは言えない。

④と⑤のグループは、ナイもタも前接する。ナカッタでもよい。シタハズガナイ・シナイワケガナイ・シナカッタノデハナイなどすべて可能である。

⑥のグループは、ナイもタも前接しない。*シタマイはシタダロウにしなければならないし、*シナイナ! は、セヨ! の意味にはならない。

2) 述語句の分類に関しては、拙稿 1982 参照

3) 動詞、形容詞、名詞(形容動詞語幹を含む)+ダの形式、(サ)セル・(ラ)レル・ガル(悲シガル)・デス・マスなどを指す。

① から ⑤ までのグループは、タが後接して完了形を作れるが、⑥ のグループはそれができない。

以上の特徴をまとめると、つぎのようになる。

- | | | |
|---|-----|---------------|
| { | ①・② | → ナイ・タ前接せず |
| | ③ | → ナイ前接, タ前接せず |
| | ④・⑤ | → ナイ・タ前接 |
| | ⑥ | → ナイ・タ前接せず |
| { | ①~⑤ | → タ後接 |
| | ⑥ | → 後接せず |

(ii) 連体修飾の可否に関して

① から ④ までのグループは、修飾句になって体言を修飾することができるが、⑥ のグループは連体修飾ができない。

⑤ のグループは、連体修飾ができないとはいえないが、①~④ のグループと修飾句の解釈のしかたが同一でない。たとえば、

- (イ) 中川サンハ仕事ヲシテイナイ。(グループ ①)
- (ロ) 中川サンハ仕事ヲスルハズガナイ。(グループ ④)
- (ハ) 中川サンハ仕事ヲスルワケデハナイ。(グループ ⑤)

のそれぞれを 2 種類の連体修飾句にしてみるとつぎのようになる。

- { (ニ) 仕事ヲシテイナイ中川サン
- { (ニ') 中川サンガ仕事ヲシテイナイコト
- { (ホ) 仕事ヲスルハズガナイ中川サン
- { (ホ') 中川サンガ仕事ヲスルハズノナイコト
- { (ヘ) 仕事ヲスルワケデハナイ中川サン
- { (ヘ') 中川サンガ仕事ヲスルワケデハナイコト

(イ)と(ニ)・(ニ'), (ロ)と(ホ)・(ホ'), (ハ)と(ヘ)は、「中川サン」という人が〈仕事ヲシナイ〉という解釈にしかならないのに対し、(ヘ')は〈中川サンガ仕事ヲシナイ〉という解釈と〈中川サン以外ノダレカガ仕事ヲスル〉というの解釈両方が可能である。⑤ グループのこの特徴は、構文論上のものという

より、意味論上のものであろうが、同じ連体修飾構造を持ちながら ①～④ グループと異なる点として考えておく必要がある。

(iii) 構文論上のレベルに関して

グループ ① から ⑥ へと構文論上のレベル⁴⁾が大きくなる。構文論上のレベルが大きいというのは、レベルの小さい述語句をその構成成分のひとつとして取り入れることができるということであり、また、レベルの小さい述語句の構成成分にはならないということである。たとえば、シノウニナイワケデハナイという文は、⑤ グループが ③ グループを構成成分のひとつにしているから、可能な文構造であるが、その反対の構造になっている*シナイワケデハナサソウニナイは成立しない。同様にシナイワケデハ^⑤アルマイ^⑥という文成分列は成立するが、*スルマイ^⑥ワケデハナイ^⑥は成立しない。

つぎに、①～⑥ グループの意味論的特徴を見てみよう。

(i) 肯定形の意味に関して

① および ② の述語句の肯定形(すなわち(ス)ル、～テイル、～テミルなど)は、現実世界の客体化表現であり、命題を表す表現である。一方、④ から ⑥ までの句の肯定形(たとえば ⑤ なら～ワケダ・～ノダ。⑥ ならそれぞれ、～ダロウ・～(セ)ヨ!または(シ)ロ!)は、客体化された命題に関する表現者(話し手・書き手など)の主體的な対応を表す陳述表現である。③ の肯定形(～(シ)ソウダ)は、表現主体が自分の目にした現実世界の状況からあることがらの生じることを予測する表現で、現実世界の描写である点では命題表現の性格を持つ一方、そこから特定の予測を引き出す点では陳述表現の性格もあわせ持つという二面性を有し、① および ② と ④～⑥ 両グループの肯定形の中間的性格を持つものである。

(ii) 否定するものの内容について

①・② グループにおける「否定」は、命題に対する否定であり、それ

4) 「構文論上のレベル」については拙稿 1982 a 参照

自体命題の一部を構成すると考えられる。一方、③ から ⑥ までの「否定」は、否定される内容がすこしずつ異なるものの、すべて陳述的性格を持つ否定である。

まず、③ の～ソウデハナイ・ソウニナイは、前接部(～の部分)で表される命題の内容を予測させるような徴候が、現実世界に存在しないという否定である。たとえば、ある食べ物について、オイシソウデハナイという表現は、そのものの味がよいと言いうる証拠がないことを、色やにおいや原料がうけいれがたいものであるという現実の中から、表現者が判断したものである。

④ の～ハズガナイ・～ワケガナイは、客観的な条件からして、〈XハYデアル〉という主張が真である可能性がないことを表す。たとえば、ある人物が来ルハズ(ワケ)ガナイというのは、表現者が話題の人物について持っている情報(旅行中デアル・入院中デアルなど)から判断して、その人が来ることの可能性を否定した陳述表現である。

⑤ の～ワケデハナイは、〈XスナワチY〉という推論自体のしかたの否定であり、他の論の組み立て方を示唆するものである。たとえば、旅行ハ好キナワケデハナイという表現は、〈旅行ヲヨクスルノハスナワチ好キダカラデアル〉という推論そのものを否定し、旅行する理由が他にあることを示唆するものである。また、～ノデハナイは、〈XハYダ〉というXとYの結びつけ方、そのように結びつける考え方自体の否定である。たとえば、ソノ件ハワタシガ彼ニシャベッタノデハナイという文は、〈彼ガ例ノ件ヲシツテイル〉という事実を「ワタシ」が責めを負うべきところと考え、〈ソノ件ノ発覚ハ「ワタシ」(ノ責任)〉と、ふたつの事項を結びつける発想自体の否定である。

以上、③ から ⑤ までは、判断の可能性の有無や論の展開の有効性に関する否定であり、単に事物の存在・生起・状態の否定ではない点で、① および ② の否定表現と意味論的に性格を異にしている。

⑥ の～マイと～ナ! は、形式としては否定と末分化だが、それぞれ、

前接する～の部分の命題に関する否定を対象にした推量・意志の表現と命令の表現であり、〈～デナイト思ワレル・～デナイヨウニスルツモリデアル〉、〈～シナイヨウニ命令スル〉という表現内容を持つものであって、推量・意志あるいは命令そのものの否定ではない。推量・意志そして命令のように表現時のその瞬間に主体的になされる陳述をそれ自体否定してしまうことは、表現そのものの存在を消滅させてしまうため不可能だからである。マイとナに共通なこの事情を図式にして表せば、次のようになる：（{否定} {推量・意志 / 命令}）

このように、一口に「否定」といっても、否定の要素をふくむ述語句の違いにより、その構文論的・意味論的な性格にかなりの相違のあることがわかる。なお、①～⑥の述語句の構文論的な性格と意味論的な性格は、相互に関連がある。すなわち、構文論的レベルの低いグループは命題表現をになう述語句であり、同じく高いレベルのグループは陳述表現をになう述語句である。そして、これらのグループの相互関係は、日本語の文成分間の階層的構造関係⁵⁾、すなわち、命題を表す低いレベルの文成分列が陳述を表す高いレベルの文成分列の構成要素となり、一定の命題的内容とそれに対する陳述を付加されて表出されるという構造を示すものなのである。

2. 「否定」との呼応

2-1 副詞類との呼応

日本語の「否定」は、サッパリ・少シモ・ケッシテ・カラキシのような副詞によっても表せる。ただし、これらは英語の *seldom*, *scarcely*, *little* などの副詞のようにそれだけで完全に否定を表すことはできず、述語句の「否定」と呼応するだけである。しかし、これらの否定性の副詞と述語句との呼応は一樣ではない。このことは、すでに 1-1 の例文 (9) と (10) の比較によって示唆されている。この節では、否定性の副詞を前節で紹介した ①～⑥ の述語句との呼応関係から見ることにする。

5) 「文成分間の階層的構造関係」については拙稿 1982 a 参照

副詞と述語句 ①～⑥ との呼応を次の 2 点から検討してみよう。

1) その副詞の作用が述語句の否定を包含するかどうか(否定への作用)

2) 否定の作用によって解釈に変更が生じるかどうか(否定からの作用)

ここで、「副詞の作用が述語句の否定を包含する」というのは、1-1 の例文 (7) サッパリ分カッテイナイのように、副詞が、分カッテイル+否定(ナイ)の意味連合を包含する形で「否定」と呼応していることである。このばあい、「否定」は副詞の意味解釈に変更を与えない。一方、1-1 の例文 (9)*サッパリ分カッタワケデハナイは、成立しない文である。したがって、サッパリは同じナイの否定でも ① の～テイナイの否定とは呼応するが、⑤ の～ワケデハナイの否定とは呼応せず、これを包含できない。2) の点は、例文 (9) のままでは検討できないので、例文 (9') に変えて考えてみよう。

(9') サッパリ分カラナカッタワケデハナイ

ここでは、サッパリは ①グループの述語句(連体修飾のためのうめこみ文の述語句になっている)の否定とは呼応しているが、やはり ⑤の否定とは呼応せず、逆にそこから否定の作用をうけて、〈100% 理解デキナカッタ〉という解釈に変更を与えられ、〈何%カ理解デキルトコロモアッタ〉という意味になっている。

一方、副詞ケッシテは、1-1 の例文 (8) ケッシテワカッテイナイ (10) ケッシテワカッタワケデハナイともに否定を包含している。そして、どちらのばあいも否定からの意味解釈変更の作用をうけない。サッパリのばあいとおなじく、

(10') ケッシテ分カラナカッタワケデハナイ

にしても、ケッシテの作用は ⑤の述語句まで及ぶし、⑤の否定の作用がケッシテの意味解釈を変えてしまうとは言えない。

以上のことをまとめてみると、つぎのようになる。すなわち、副詞サッパリは、

1) ①・② の否定を包含する。

2) ⑤ とでは否定の作用をうける

また、副詞ケッシテは、

- 1) ①・②・⑤ の否定を包含する。
- 2) ①・②・⑤ の否定の作用をうけない

という特徴をそれぞれ持っているというわけである。

同様の分析によって、いくつかの否定性の副詞を分類してみるとつぎのようになる。

(i)⁶⁾ 1) ①～③ の否定を包含する

2) ④・⑤ の否定の作用を受ける

例：カラキシ・サツパリ・チットモ・ヒトツモ

(ii) 1) ①～④ まで否定を包含する

2) ⑤ の否定の作用を受ける

例：少シモ・チットモ・ゼンゼン・トウテイ

(iii) 1) ①～⑤ の否定を包含する

2) ①～⑤ の否定の作用を受けない

例：ケッシテ・ドウモ・サラサラ・ベツニ・別段・毛頭

(iv) ⑥ の陳述的な部分にまで作用が及ぶ。したがって、否定を包含し、否定からの作用は受けない。ただし、⑥ の～マイとしが共起しない。

例：ユメユメ

このように、同じ否定性の副詞でも、そのそれぞれが呼応する「否定」の種類は同一ではない。したがって、日本語教育でこれらの副詞を扱う際には、単に動詞類の否定形とだけ結びつけて導入・練習するのではなく、呼応するあらゆる種類の述語句の「否定」との関係が習得できるように配慮しなければならないのである。

2-2 「ハ」との呼応

「否定」の問題を考えると、もうひとつ重要なのは、対照の 1) と「否

6) 本稿での(i)・(ii)・(iii)・(iv)の番号は、公開講座中に配布したシジュメではそれぞれ(IV)・(V)・(VI)・(VII)と対応する。

定」の呼応である。否定文における対照への機能は、否定される対象を明示することによってその文構成成分の表す意味とは別な意味領域の存在を暗示することである。たとえば、

太郎ハ次郎ニハ英語ノ雑誌ヲアゲナカッタ

という文では、ハの付加によって、否定される対象が「次郎ニ」という文成分であること、およびこの文が〈太郎が雑誌ヲ与エタノハ次郎以外ノダレカデアル〉という意味を持ちうることを示される。このように対照ハは否定文の解釈にとって重要な機能を持つが、すべての文構成成分に対照ハがつけられるものでもない。たとえば、2-1で検討した否定性の副詞には、対照のハがつけられない。そのほか、トテモ・ソウトウ・ズット(比較)・キワメテ・モチロン・アイニク・オソラクなどの程度の副詞や評価の副詞もそうである。また、様態の副詞のなかで特定の動詞の意味と密接に結びついているものは、やはり対照ハをつけられない。たとえば、ゴロゴロ(寝ル)・ズルズル(ススル)などである。

対照のハがひとつの文にふたつ以上あるばあいの解釈も問題である。たとえば、

彼ハソノ事ハハッキリトハ言ッテハイナイという文では、どれが提題のハか、どれが対照のハか決定できないと解釈が下せない。しかも、この文が成立しない文であるとは思えないところから、このようにハが重複して起こる現象には、文レベルの文法ではなく文章レベルの文法が必要になってくるものと思われる。

このように、対照のハの付加は、文の意味の解釈にとって重要でかつむずかしい問題を含むものである。日本語教育では、否定文生成の練習の際、どこに対照のハをつけるか、あるいは述語句だけを否定形にしてそれよりまえの文成分には対照ハをつけないでいいのかどうかについて、「何が否定され、その結果何が暗示されるか」という観点から検討をくわえる必要があると思われる。

3. おわりに

以上、「否定」という現象についてさまざまな問題を指摘してきたが、最後にふたつの「否定」に関する学生の誤文例をあげてしめくりにした。例文(11)は中国人、例文(12)はアメリカ人の、それぞれ中級後半程度の学生のものである。

(11) 私は弟が病気なので見舞いきませんでした。

(12) 友だちはもちろん自分の誕生日にプレゼントをもらうために(相手ニプレゼントヲ)買いませんでした。

このふたつはそれぞれ、〈弟が病気ダカラ見舞イニイカナカッタノデハナイ〉、〈友ダチハオ返シガホシクテ相手ニプレゼントヲシタワケデハナイ〉という意味であることが文脈全体からあきらかである。このように～ノデハナイ・～ワケデハナイというタイプの「否定」がつくれない学生はかなり多い。このふたつの誤用例は、中上級における否定文生成のむずかしさをよく表すものだと思う⁷⁾。一般に、日本語教育の現場では、否定文は肯定文に従属した形(つまり肯定文の否定変形)として扱われることが多いようであるが、上記のような誤文例を減らすためには、「否定」という現象を「肯定+ナイ」という形式からだけでなく、「否定されるものの内容」という観点から独自にとりあげていく必要があると思われる。本稿では、そのために必要となる「否定」自体の分析に関して若干の問題を指摘したにすぎない。具体的な教授法については、今後研究を進めていきたいと考えている。

参考文献

- 岩倉国語 1974 『日英語の否定の研究』 研究社
太田 朗 1980 『否定の意味』 大修館
川口義一 1982 a 「文型の構文論」・『語学教育論集 1』 早稲田大学語学教育研究所

7) ～ノデハナイ・～ワケデハナクに対応する「否定」の形式は、中国語では“不是…的”，英語では“not because”で表しうるから、これらの誤例が母国語の干渉から起きたとはいえない。

- 1982 b 「副詞の構文論上の位置づけ」・『木村宗男先生記念論文集』 早稲田
大学語学教育研究所
- 寺村秀夫 1980 「ムードの形式と否定」・『林栄一教授還暦記念論文集』 くろし
お出版
- 原田登美 1982 「否定との関係による副詞の四分類」・《国語学》128
- 森田良行 1977 『基礎日本語』I 角川書店
- 1980 『基礎日本語』II 角川書店